

こども支援団体・企業ランチ交流会

スマイリーキッチンさん
ご提供のお弁当！



支援団体コラボの好事例紹介



笑顔のこども食堂ネットワーク-GOHAN-プロジェクトリーダー 多橋和輝氏

笑顔のこども食堂ネットワーク-GOHAN-の多橋和輝さんによる支援団体コラボの事例紹介から、ランチ交流会はスタートしました。何気ないつながりからコラボは実現可能だそうで、連携につながる要素として、「さまざまな団体につながっていること」「お互いの活動を知っていること」の2点が重要との説明がありました。「SNSのフォローでも、名刺交換でも、些細なつながりでも OK」と多橋さん。「今日のイベントでも、交流会を通して互いの強みや弱みを共有しあい、『こどもまんなか』をキーワードにしてつながっていきましょう」と会場全体に呼びかけました。

支援が必要な人が増える中、団体や企業がつながり、支援の輪を広げ、いつでも連携ができるような関係性を作ることを目的にランチ交流会を開催しました。

参加企業の紹介

株式会社パローホールディングス



サステナビリティ推進室 秋元氏

サステナビリティ推進室の秋元さんより、「スーパーだけではなく、ドラッグストアにもフードドライブポストを置き、より多くの人に協力してもらえる体制を整えた」と説明がありました。新たな取り組みとして、ドラッグストアの化粧品で母親向けコスメ教室の開催や、スポーツクラブと連携して子どもの運動能力を高める活動も行なっているとのこと。地域への貢献に力を込めていました。

アルビス株式会社

「提供してもらった食品がどのように家庭に届いているかなどもお知らせして、積極的に参加してもらえよう工夫している」とブランド推進部の高橋さん。食育活動にも力を入れていて、地産地消の大切さや食の楽しさを伝える活動も行っているそう。子どもたちの見守り活動や、健康づくり活動、マラソン大会の開催もしていて、「一過性ではなく、地域と協力して継続していきたい」と述べました。



ブランド推進部 高橋氏

グループワーク

グループごとに『団体紹介と強みと課題』『こどもまんなか社会を作るために私ができること』というトークテーマで話し合いが行われました。おいしいお弁当をいただきながら、どのテーブルでも、前向きな意見が出ていました。



まとめ



金沢星稜大学 人間科学部 川並利治教授

ランチ交流会のまとめとして金沢星稜大学の川並利治先生から、支援してほしい人が SOS が出しにくいという現状の中で、アウトリーチを続けていくしかないという旨が述べられました。こちらから出ていって「こんな居場所があります」「食事できます」「話も聞いてもらえます」と伝え続けることが大事とのこと。

「お互いに知らないということが一番のネックになっている。学生も一度でも地域活動に関わると社会課題に気づききっかけになる。まずは一緒に汗を流すこと。きっとお互いのいいところが見えてくる」と参加者を勇気づけました。

さらに「人間には恒常性があり、心理的な安心を求めて環境の現状維持を図ろうとする。変わらないことで安定するので、虐待やDV、貧困、ひとり親など、不安定な安定をしているところに切り込む方法を考えよう」と語りました。

トークイベント 「イマドキの子どもが抱える問題と今必要な支援」



現代の子どもを取り巻く環境や問題をどう考えていけばいいのか、支援者で語り合うトークイベントを開催しました。

基調講演

沼田先生は小児科医として、多くの親子と関わってきました。「一般論ではなく私から見えることを」と前置きのもと、先生の講演がスタート。

近年の大人は物質的に不十分な生活に心を痛めているけれど、実際は親の職業や経済面と子どもの育ちは関係ないと語ります。大切なのは「どんな人と出会うか」ということ。「あなたは大事な人」「かけがえない人」と子どもに言い続けられる人が周りにいるかどうか。親が一番いいけれど、親がだめならほかにもそういう人がいるか、それが人生を支えていく基盤になると強調します。

自分を大事に思えない大人も、さかのぼると子ども時代にぶちあたそう。自分の人生を大事にするためには、幼少期に支えてくれる人がいたかどうかが重要で、このプロセスを通して他者への信頼が育まれると沼田先生は語ります。

「子どもに必要なのは心のお守り。何かあったときに抱きしめてくれる人、見てくれる人がある、そう思える子は強い」と沼田先生。人は関係性の中で生きてるので、周りの大人がどう子どもに関われるかが問われているそうです。

最近気になる点として「保育所に行っても近づいて来る子が減った気がする」と話します。なぜ減っているのか考えたときに、大人が忙しいからではないかと。「見て！」



石川県南加賀保健福祉センター所長 小児科医 沼田直子氏

と言っても、近年の大人はスマホばかり見ている。子どもが大人に求めなくなっているのではないかと、人に関心を示さない子どもたちが増えているのではないかと危惧します。

さらに「昔は情報がないから評価に揺さぶられずに済んだけれど、今は情報が溢れ、生まれた時から評価される時代。親たちは早期から教育にのめり込む。昔はこんなに一生懸命走らされていただろうか。子の幸せを感じられる時期がどれだけあるだろうか」と警鐘を鳴らします。

「子どもだけでなく大人も常に評価にさらされ、簡単に傷つく大人たちが増えている印象がある。まるで思春期のように沼田先生。確かに大人に余裕がなく簡単にへこむと誰かにエネルギーを与えることはできません。「若い世代が信頼できる大人と出会えるような、そんな支援が求められている」と述べました。

パネルディスカッション

講演に引き続いて、パネルディスカッションが行われました。

暴力のない社会の実現に向けて活動をしている CAP いしかわ代表の新田川さんは「子どもは本来エネルギーを持って生まれてきているのに、何らかの原因でエネルギーが出せなくなっている。学校と家庭と地域が子どもを真ん中にして、安心安全のために何ができるか考えていきたい」と話しました。さらに、困ったときに誰にも相談しない子どもも一対一で話すと「親は忙しそうだし先生には迷惑がかかる」と相談しない理由を話してくれるそうで、「相談してくれていいんだよ」と子どもと社会をつなぐ役目を今後も担っていきたくて語りました。

金沢市児童家庭相談室の前田さんは、



CAP いしかわ代表 新田川美香氏



金沢市子ども未来局 児童家庭相談室長 前田和歌子氏

現在市では子どもソーシャルワーカーを中心に、医療、保健、教育等の関係機関と連携し、民間の支援団体とも協力しながら、きめ細やかな支援を進めていることを説明。

令和4年度からは拠点型子ども宅食事業をモデル事業として開始し、今年度から本格スタートしたとのこと。実際にやってみて「多くの人が最初は食材を目的で来るけれど、実際に来るといろんな話をしてくれる。よくよく聞くと深刻な状況にある。でもどこにも相談していない。支援が届きにくい家庭を見つけて、支援につなげていきたい」と語りました。

WEK プロジェクトの坂井は、子ども見守り支援事業の中で、買い物をして、家に届け、愚痴を聞いて、子どもに会っ

て...というアウトリーチ活動について述べました。「待っていても自ら出てこれない人たちに対して、ドアをノックして開けてもらうために、食材を持って行っている」と語ります。さらに「親も子ども、安心して信頼できる関係性が大事なので、社会で子どもを育てるということを実践していきたい」と話しました。

最後に沼田先生が、「物をあげるのは大事だけれど、支援者が永遠に伴走していくことはできない。その人自身の無力感を断ち切る支援、エンパワメントが必要であり、支援の本質はそこだと思う。その人自身が頑張ろうと思える力を養えるように、つながることのよさを散りばめていきましょう」と締めくくりました。



NPO 法人 WEK プロジェクト代表 坂井美津江